

[研究論文]

小学校5年生の社会的能力とレジリエンスの関係
—小学生版「社会性と情動」尺度と児童用レジリエンス尺度の関係—

Fifth graders' social and emotional competence and resilience:
Relationship between Social and Emotional Abilities Scale for Elementary School Children and Resilience Scale
for Elementary School Children

藤原 佑一
Yuichi FUJIWARA

小泉 令三
Reizo KOIZUMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
志免町立志免西小学校

福岡教育大教職実践講座

(2017年1月31日受理)

本研究では、レジリエンスとSEL-8Sプログラムで育成を図る8つの社会的能力の関係を明らかにし、今後のSEL-8Sプログラムを用いての小学生のレジリエンス向上の取組の基礎資料を得ることを目的とした。まず、レジリエンスの研究の動向を概観し整理を行った。その後、先行研究を参考に、小学5年生182名を対象にして、児童用レジリエンス尺度(田中, 2012)を再検討した。その結果、この尺度は意欲的活動性、楽観性、内面共有性の3つの下位尺度から構成されると考えられた。SEL-8Sの8つの社会的能力と児童用レジリエンスの3因子の相関を調べた結果、すべての下位尺度間で有意な正の相関がみられ、SEL-8Sプログラムの活用が、社会的能力だけでなく、小学生のレジリエンスの向上につながる可能性が示唆された。

キーワード：レジリエンス，社会的能力，社会性と情動の学習，小学生

1 問題と目的

レジリエンスの定義と測定尺度

近年、様々な分野で、精神的健康に必要な要因としてレジリエンス(resilience)という概念が注目を集めている。レジリエンスは、日本語で「弾力性」、「立ち直る力」などと訳されるが、最近では「レジリエンス」とそのまま用いられることも多い用語である(長尾・芝崎・山崎, 2008)。我々は、日常生活の中で、様々なストレスと直面する可能性をもっている。例えば、人間関係、自然災害、親しい人との別離、事件や事故など大小さまざまなストレスが考えられる。本研究では、このようなストレスと直面した際に、上手く適応する過程・能力・結果のことをレジリエンスとする(石毛・無藤, 2005)。

森・清水・石田・富永・Hiew(2002)は、「生きる力」には、大きく自己教育力とレジリエンスという2つの構成要因があると指摘している。この

うち自己教育力は数多くの研究がなされているが、レジリエンスについてはいまだ十分な学術的分析がなされていないと指摘している。しかし、「生きる力」が提唱された1990年代後半は、レジリエンスは我が国ではまだほとんど知られていない新しい概念であった。小塩・中谷・金子・長峰(2002)は、レジリエンスという概念をとらえる際に、適応の過程、能力、結果のうちどの部分に焦点を当てるかは研究者によって異なっており、統一的な見解はみられていないとしている。その後の国内の主なレジリエンスの定義をまとめると表1のようになるが、確かに研究者によって定義に違いがあることがわかる。

村木(2015)のレビューによると、国内のレジリエンス研究は、国外に比べるとその歴史は浅く、1990年後半より始まったとされ、阪神・淡路大震災後のストレス研究が初期の研究とされている。その後、比較的健康状態が高い者に対するレジリエンスの研究が盛んに行われ、より一般化された誰にでも起こりうる、または誰しもが経験する

表1 国内の主なレジリエンスの定義

研究者	レジリエンスの定義
小塩・中谷・金子・長峰(2002)	困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している状態
森・清水・石田・富永・Hiew(2002)	逆境に耐え、試練を克服し、感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理特性
石毛・無藤(2005)	困難な状況にもかかわらず適応に成功した過程・結果あるいは能力
井隼・中村(2006)	心のしなやかさ、つまりダメージを和らげる働きをする力
齊藤・岡安(2010)	ストレッサーを経験しても心理的な健康状態を維持する、あるいは一時的に不適応な状態に陥ったとしても、それを乗り越え健康的な状態へ回復していく力や過程
平野(2010)	困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している状態
竹田・山本(2013)	ストレスフルな経験や脅威の存在にもかかわらず精神的健康や適応行動を維持する個人傾性あるいはその過程

リスク状況を対象として、予防的な観点での研究が盛んに行われているのが日本のレジリエンス研究の特徴と考えられる(石原・中丸, 2007)。

定義と同じく、個々人のレジリエンスを測定する尺度も数多く存在する(表2)。平野(2010)は、レジリエンスは様々な要因によって導かれる力であるため、誰もが保持し高められることができるとしたうえで、レジリエンスを資質的要因と獲得的要因に分け、後天的に身につけやすいものと、そうでないものに分けて二次元レジリエンス尺度を作成している。井隼・中村(2008)は、レジリエンスを個人資源の認知、個人内資源の活用、環境資源の認知、環境資源の活用の4つの側面に分類し4つの尺度を作成した。小塩(2016)は、レジリエンスの尺度に含まれる因子の項目内容に3つの特徴があるとまとめている。1つ目は、「自己肯定・自信」や「対人・問題解決」に関連する因子が比較的多く、特に「感情・衝動制御」に関する因子は少ないこと、2つ目は若い年代を対象として作成された尺度は、内容がシンプルで比較的小さい因子数で構成されていること、3つ目は以前に作成された尺度よりも、新しく作成された尺度のほうが、広い概念をカバーしようと試みているように見受けられることである。

レジリエンスと諸概念との関係

レジリエンスを個人の能力・特性ととらえる多くの先行研究では、レジリエンスとセルフエスティーム、コーピングなどとの関連を研究し、レジリエンスという概念をより明らかなものにしよう

としている。

例えば小塩ら(2002)は、大学生のレジリエンスと同義の精神的回復力の尺度の各得点はセルフエスティームと有意な正の相関を示したと報告している。しかしセルフエスティームは過去のネガティブなライフイベントの経験の有無に影響を受けるが、その一方で、精神的回復力およびその下位尺度はそのような影響を受けにくいことを示し、レジリエンスとセルフエスティームの違いを明らかにしている。

また、コーピングおよびハーディネスとの関係は、石毛・無藤(2006)では、次のように説明されている。すなわち、コーピングはストレス反応の抑制を目的とし、適応を促進し、プロセスに注目した概念であるのに対し、レジリエンスは適応状態に至ったという結果を重視し、対処能力と内的な適応状態の維持の両方を含む。また、ハーディネスは逆境下での心理的強さを表した概念で、ストレッサーに挑戦する強さを表すのに対し、レジリエンスはストレスから立ち直る強さを表す点で両者は異なるとしている。

小学生のレジリエンス研究

小学生を対象にしたレジリエンスの研究は少ない。その中で、原・古田(2011)は、小学校5~6年生162名を対象にレジリエンスとコーピングの役割を検討している。そこで用いた尺度は、小塩ら(2002)が大学生を対象に作成した精神的回復力尺度24項目を、小学生への質問として適した表現に変更したものである。肯定的な未来志向を表す未来志向、ものごとくに興味や関心を示し、追求していく興味・関心の追求、内的な感情を調整することができる感情調整、困難な状況や気分左右されずに耐える力を表す忍耐力の4因子が確認されている。ただし、その後の研究(原・古田, 2012)では未来志向、興味・関心の追求、感情調整の3因子構造が確認されており、感情調整と忍耐力は小学生にとって区別されたりされなかったりする不安定な因子であると考えられる。

田中(2012)は小学校4年~6年生184名を対象に児童用レジリエンス尺度の作成を行った。石毛・無藤(2005)の中学生用のレジリエンス尺度や高辻(2002)の幼児用のレジリエンス尺度を参考に、小学生に理解可能な表現になるように修正を加え、さらに小学校6年生24名に半構造化面接を実施し収集された項目候補を加えて作成した。内面共有性、楽観性に関しては、石毛・無藤(2005)の中学生用のレジリエンス尺度と同様の結果であったが、中学生で意欲的活動性と解釈された因子が小

表2 国内のレジリエンス尺度(例)

対象・尺度名	因子名	因子の説明
幼児期		
尺度名 : レジリエンス尺度 文献 : 高辻 (2002)	社会的スキルの柔軟な利用	幼児にとってストレスフルと思われる対人場面での内面や行動の柔軟さ。
尺度名 : 幼児用レジリエンス尺度 文献 : 長尾・芝崎・山崎 (2008)	気質 自己調整 傷つきにくさ	初めての活動や初めて会う人に対して肯定的な態度を示す「気質」、ストレスフルな出来事に遭遇した時にネガティブにならない「傷つきにくさ」、適応的であるために要求される「自己調整」の3つの因子。
小学生		
尺度名 : 児童用レジリエンス尺度 文献 : 田中 (20012)	楽観性 挑戦性 内面共有性 積極的活動性	いやなことがあった時でもよくよしないなどの「楽観性」、課題を遂行する際に困難があっても取組を途中で投げ出さないようにしようとしているなどの「挑戦性」、悲しい時は自分の気持ちをきいてもらいたいと思うなどの「内面共有性」、全体的に積極的に物事に取り組む傾向を表す「積極的活動性」の4つの因子。
尺度名 : レジリエンス尺度 文献 : 原・古田・松村 (2011)	未来志向 興味・関心の追求 感情調整 忍耐力	将来の夢や目標をもつことや将来の計画を立てること等の肯定的な未来志向を表す「未来志向」、ものごとの興味や関心をもち、追求していく「興味・関心の追求」、内的な感情状態を調整することができる「感情調整」、困難な状況や気分にな左右されず耐える力を表す「忍耐力」の4つの因子。
中学生		
尺度名 : レジリエンス尺度 文献 : 石毛・無藤 (2005)	意欲的活動性 楽観性 内面共有性	あきらめずに挑戦し、前進しようとする「意欲的活動性」、物事をよい方向で考える「楽観性」、自分の行動を振り返る「内面共有性」の3因子。
大学生		
尺度名 : レジリエンス尺度 文献 : 森・清水・富永・Hiew (2001)	I AM I HAVE I CAN I WILL	本当の自分から目をそらさずに見つめる力である「I AM」、他者との信頼関係を築き、学びのネットワークを広げていく力である「I HAVE」、問題解決力の「I CAN」、自分自身で目標を定め、それに向かって伸びていく力である「I WILL」の4因子。
尺度名 : 精神的回復力尺度 文献 : 小塩・中谷・金子・長峰 (2012)	新奇性追求 肯定的な未来志向 感情調整	いろいろなことにチャレンジするのが好きだ、新しいことや珍しいことが好きだなどの「新奇性追求」、肯定的な将来への期待を意味する「肯定的な未来志向」、自分の感情をコントロールできる方などの「感情調整」の3因子。
尺度名 : 個人内資源の認知尺度 文献 : 井隼・中村 (2008)	楽観的思考 社交性 関心の持続・多様性 有能感	楽天的、あまりこだわらないといった「楽観的思考」、人とのかわりを表す「社交性」、「多方面への関心と粘り強さを示す「関心の持続・多様性」、自分の能力に関する「有能感」の4因子。
尺度名 : 個人内資源の活用尺度 文献 : 井隼・中村 (2008)	楽観的思考 熟考的思考 気晴らし行動 状況分析行動	深く問題等にこだわらず前向きに考える「楽観的行動」、再度同じ過ちを起こさないように工夫するといった「熟考的思考」、何か他の行動をして気分を紛らわすといった「気晴らし行動」、今置かれている状況などを多角的に捉えようとする「状況分析行動」の4因子。
尺度名 : 環境資源の認知尺度 文献 : 井隼・中村 (2008)	家族資源 友達資源 仲間・先輩資源	家族資源の有無を問う「家族資源」、実際に状況や環境を共有でき、直接的な働きかけが行われる友達に関する「友達資源」、仲間集団へ属すること自体に意味があるとする「仲間・先輩資源」の3因子。
尺度名 : 環境資源の活用尺度 文献 : 井隼・中村 (2008)	家族資源 友達資源 仲間・先輩資源	家族資源の有無を問う「家族資源」、実際に状況や環境を共有でき、直接的な働きかけが行われる友達に関する「友達資源」、仲間集団へ属すること自体に意味があるとする「仲間・先輩資源」の3因子。
尺度名 : 二次元レジリエンス尺度 文献 : 平野 (2010)	楽観性 統御力 行動力	将来に対して不安をもたず、肯定的な期待をもって行動できる「楽観性」、もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的体調に振り回されずにコントロールできる「統御力」、目標や意欲を、もともとの忍耐力によって努力して実行できる「行動力」、もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者とのかわりを好み、コミュニケーションを取れる「社交性」の4因子。
尺度名 : 二次元レジリエンス尺度 文献 : 平野 (2010)	問題解決思考 自己理解 他者理解	状況を改善するために、問題を積極的に解決しようとする意志をもち、解決方法を学ぼうとする「問題解決思考」、自分の考えや、自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができる「自己理解」、他者の心理を認知的に理解、もしくは受容する「他者理解」の3因子。
尺度名 : 大学生用レジリエンス尺度 文献 : 齊藤・岡安 (2010)	コンピテンス 肯定的評価 親和性 ソーシャルサポート 重要な他者	環境と効果的に相互交渉する能力をもち、効果的な変化をもたらすことができるという自己評価ができる「コンピテンス」、個人に対して与えられる多次元の実際の支援とその資源である「ソーシャルサポート」、何らかの事象に対してより楽観的あるいは肯定的な側面を重視して評価する「公的評価」、他者あるいは状況や場所に対して肯定的に接することができる「親和性」、個人の人生において重要な意味をもち様々な側面に影響を与える人物である「重要な他者」の5因子。
尺度名 : 大学生版レジリエンス尺度 文献 : 竹田・山本 (2013)	思考・行動・感情の整理 ソーシャルサポートの希求 行動の切り替え 思考・感情の切り替え	起こった出来事を振り返り自己を見つめなおす「思考・行動・感情の整理」、前向きな思考・感情に努めるといった「思考・感情の切り替え」、他者に話をするなどの「行動の切り替え」、興味のある事柄取り組み気分転換を図る「行動切り替え」の4因子。

(注)小塩(2016)を参考に、小学生の尺度及び因子の説明を加えた。

学生の場合だと挑戦性と積極的活動性に分かれていると確認された。

森岡・岩元(2011)は、小学校1年生の学校不適応の問題を、高辻(2002)、小花和(1999)により作成された幼児用レジリエンス尺度の一部を使用して検討している。小学校入学期のレジリエンスを幼稚園の担当教師や保護者へのアンケートをもとに調査した研究である。坂柳(2016)は、キャリア教育において、子どもたちの生き抜く力を育むため、基礎的・汎用的能力(能力的側面)の育成だけでなく、生き抜く態度(態度的側面)の両面を測定できるキャリア・レジリエンス尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討している。

小学生のレジリエンスを高める実践

小学生の学校生活に目を向けてみると、いじめや不登校の問題が解決されず、様々な場面でストレスが多い現代の子供たちに必要な力として、レジリエンスを高めることは重要なことだと考えられる。しかし、学校でレジリエンスという概念を意識し、育成していく試みはほとんど見られない。その中で、原・都築(2016)は、レジリエンスを高める試みとして、学級単位で45分のスキル重視型の学習を行い、レジリエンスが高まるか検証を行い、レジリエンスは学習で高めることができること、ポストテストから1週間後も学習の効果があることを報告している。しかし、未来志向、興味関心、感情調整のいずれかを上げるために準備された3種類の学習を、1つの学級に1時間ずつの学習を行う実践だったため、3種類のそれぞれの学習が他のレジリエンスの側面にどう影響し、組み合わせるとレジリエンスにどう影響を与えるのか検討をすることが課題として考えられる。小学生の発達段階を考慮した、レジリエンスを高めるための効果的・計画的な指導法を検証していくことは大変意義深いと考える。

そこで、レジリエンスを高める効果的・計画的な指導法としてSEL-8S(Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School)プログラム(小泉, 2011)に着目した。SELとは社会性と情動の学習の略であり、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を身につける学習」と定義されている。SEL-8Sプログラムとは、総称としてのSELの中の特定の学習プログラムで8つの社会的能力(表3)の育成を目指したものである。この中の基礎的な社会的能力とは、汎用的で日常のさまざまな生活場面で必要な能力である。また、応用的社会能力とは、5つの基礎的社会的能力をもとにしたもの

表3 SEL-8Sの8つの社会的能力

基礎的な社会的能力	自己への気づき
	他者への気づき
	自己のコントロール
	対人関係
応用的な社会的能力	責任ある意思決定
	生活上の問題防止のスキル
	人生の重要事態に対処するスキル
	積極的・貢献的な奉仕活動

で、より複合的で応用的な3つの能力である(小泉, 2011)。

橋本・小泉(2013)は、SEL-8Sプログラムを小学校全学年で5~9回実施し、社会的能力だけでなく、セルフエスティームの上昇が見られることを示唆している。小塩ら(2002)の先行研究から、レジリエンスとセルフエスティームは有意な正の相関があるとされているため、SEL-8Sプログラムを実践することは、児童の社会的能力だけでなくレジリエンスを高める効果も期待できる。

本研究の目的

本研究では、レジリエンスとSEL-8Sプログラムで育成を図る8つの社会的能力の関係を明らかにし、今後のSEL-8Sプログラムを用いての小学生のレジリエンス向上の取組の基礎資料を得ることを目的とした。なお、これまでの研究で小学生対象の尺度については、因子数が3因子になったり4因子になったりと因子の数が安定しないという問題が見られるため、この機会に再度検討することとした。

2 方法

研究期間：2016年10月

研究対象：福岡県内のA小学校第5学年5クラス182名(男子100名、女子82名)。

手続き：質問紙を配布し学級担任の指導のもとに授業時間に集団で実施した。全員記名で学級担任から、この調査は成績とは無関係なことを説明してもらい、学級担任が読み上げながら調査を行った。所要時間は30分程度であった。

質問紙の内容

①社会的能力

SEL-8Sプログラムが育成目的としており、生きる力にも通じる5つの基礎的な社会的能力と3つの応用的な社会的能力を測定する、26項目の小学生版「社会性と情動」尺度(田中・真井・津田・田中, 2011)を用いた。回答方法は4段階評定法(1~

4点)である。

②レジリエンス

田中(2012)が作成した児童用レジリエンス尺度の質問項目19項目を使用した。回答方法は「とてもそう思う」から「あまりあてはまらない」の5段階評定法(1~5点)である。

3 結果

欠席者と回答に不備のある者を除く、168名(男子88名,女子80名)を分析対象とした。分析にはHAD15(清水,2016)を使用した。

因子構造:まず,児童用レジリエンス尺度の各項目の平均値とSDをもとに天井・床効果が疑われる項目について検討した。平均値±1/2SDが5.00以上,あるいは1.00以下の数値を示す項目がなかったため19項目すべての項目を採用した。

次にこれら19項目の因子分析(最尤法,プロマックス回転)を行った。固有値の変動状況は順に8.13, 1.73, 1.59, 0.96, 0.81, 0.72となり,第3因子と第4因子の間に比較的大きな開きがあり,かつ固有値1.0の規準も適用して3因子解を第1候補とした(表4)。適合度の指標は $\chi^2=239.72$ ($df=117, p<.00$), CFI=.918, RMSEA=.084, AIC=361.65

であった。

次に4因子解を第2候補として同様に分析した結果,適合度の指標は $\chi^2=192.97$ ($df=101, p<.00$), CFI=.938, RMSEA=.079, AIC=345.05であり,3因子解より適合度は高かった。しかし,4因子解の場合,第4因子には2項目(項目10と項目14)しか採用できないため,解釈の都合上3因子解の方がより適切であると判断した。なお,3因子解では19項目すべてを採用できるが,4因子解では2つの因子に絶対値で.40以上の負荷量を示す項目が2つ(項目9と項目16)あった。

3因子解の3つの因子は,中学生用のレジリエンス尺度(石毛・無藤,2005)の3因子を構成する質問項目と全く同じではないが,内容的にはほぼ同一であるため,第1因子を意欲的活動性,第2因子を楽観性,第3因子を内面共有性と命名した。

信頼性の検討:Cronbachの α 係数は,意欲活動性因子は $\alpha=.890$,楽観性因子は $\alpha=.816$,内面共有性因子は $\alpha=.860$ で,内部一貫性があると判断できる数値が得られた。因子間の相関は意欲的活動性と楽観性は $r=.676$,意欲的活動性と楽観性は $r=.588$,内部共有性と楽観性は $r=.517$ とすべてに中程度の相関がみられた。

性差の検討:小学生版社会性と情動尺度と児童用

表4 児童用レジリエンス尺度(最尤法・プロマックス回転後)

項目	I	II	III	共通性
意欲的活動性 ($\alpha=.890$)				
4 決めたら必ず実行する	.902	-.149	-.086	.584
5 失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する	.872	-.136	-.020	.601
1 やり始めたことは最後までやり通す	.815	-.084	-.090	.509
9 新しい行事や仕事にすぐなれる方だ	.774	-.082	-.016	.507
15 何かしようと思ったとき,色々な方法を考える	.611	.061	.046	.466
10 新しい友達や先生に積極的に話かけることができる	.607	.059	.037	.450
8 苦手なことでも失敗を恐れずに取り組む	.525	.241	-.033	.477
19 自分の間違いやルール違反を友達から注意されたとき,そのことを認めて行動を正しくすることができる。	.432	-.100	.228	.283
14 自分は学校で元気に活動していると思う	.355	.286	.168	.493
7 自分に自信がある	.346	.309	.169	.512
楽観性 ($\alpha=.816$)				
16 いやなことでも,時間がたてば自然に忘れることができる	-.337	.794	-.040	.367
18 何事もよい方向に考える	.090	.773	-.060	.649
17 いやなことがあった時でも,くよくよしない	.185	.713	-.135	.611
12 困った時,考えるだけ考えたらもう悩まない	-.059	.705	-.005	.441
3 困ったことが起きても,よい方向に考えるようにしている	.045	.632	.084	.506
内面共有性 ($\alpha=.860$)				
11 悲しい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	-.076	-.075	1.005	.862
6 つらい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	-.054	-.105	.975	.805
2 困った時,友達に助けてほしいとお願いできる	.070	.136	.555	.468
13 考えを人に聞いてもらいたいと思う	.298	.233	.380	.607
因子寄与	6.877	5.803	5.005	
因子間相関				
	.676	—		
	.588	.517	—	

レジリエンス尺度の、それぞれの1項目当たりの平均点を算出し、社会的能力得点、レジリエンス得点とした。また、それぞれの下位因子に相当する項目の1項目当たりの平均点を出した。小学生版「社会性と情動尺度」では、自己への気づき得点、他者への気づき得点、自己のコントロール得点、対人関係得点、責任ある意思決定得点、生活上の問題防止スキル得点、人生の重要事態に対処する能力得点、積極的・貢献的な奉仕活動得点とし、児童用レジリエンス尺度では、意欲的活動性得点、楽観性得点、内面共有性得点とした。

小学生版「社会性と情動」尺度、児童用レジリエンス尺度の性差を調べるためにt検定を行った。

表5 各尺度の男女別平均値、標準偏差及びt検定の結果

	男子(n=88)		女子(n=80)		t値 (df=166)
	M	SD	M	SD	
レジリエンス					
意欲的活動性	3.96	0.77	3.99	0.69	0.23
楽観性	3.63	0.99	3.49	0.93	0.99
内面共有性	3.67	1.08	4.03	0.93	2.32*
社会的能力					
自己への気づき	2.98	0.70	3.1	0.57	1.17
他者への気づき	3.24	0.63	3.53	0.48	3.34**
自己のコントロール	3.17	0.62	3.28	0.49	1.30
対人関係	3.37	0.56	3.38	0.54	0.14
責任ある意思決定	3.22	0.64	3.38	0.41	1.95+
生活上の問題防止のスキル	3.62	0.48	3.86	0.28	3.99**
人生の重要事態に対処する能力	3.21	0.70	3.50	0.44	3.17**
積極的・貢献的な奉仕活動	2.95	0.70	3.12	0.61	1.67+

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表6 「小学生版『社会性と情動』尺度」、児童用レジリエンス尺度の各因子間の相関係数

	自己への 気づき	他者への 気づき	自己の コントロール	対人関係	責任ある 意思決定	生活上の問題 防止のスキル	人生の重要事態 に対処する能力	積極的・貢献 的な奉仕活動
男女								
意欲的活動性	.539**	.533**	.733**	.574**	.683**	.443**	.640**	.656**
楽観性	.521**	.301**	.502**	.484**	.473**	.189*	.401**	.573**
内面共有性	.447**	.482**	.567**	.499**	.605**	.401**	.593**	.547**
男子								
意欲的活動性	.549**	.634**	.752**	.654**	.787**	.548**	.722**	.644**
楽観性	.601**	.323**	.503**	.533**	.534**	.251*	.515**	.554**
内面共有性	.506**	.472**	.558**	.531**	.656**	.431**	.658**	.563**
女子								
意欲的活動性	.529**	.411**	.711**	.474**	.527**	.301**	.553**	.681**
楽観性	.434**	.350**	.532**	.430**	.438**	.181	.303**	.637**
内面共有性	.337**	.441**	.565**	.474**	.489**	.259*	.431**	.501**

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

各尺度の男女別の平均値と標準偏差及び分析結果を表5に示す。得点の有意な差または傾向が認められたのは、レジリエンスの内面共有性、社会的能力の他者への気づき、責任ある意思決定、生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動の下位尺度で、男子より女子の得点の方が高かった。

各因子間の相関:小学生版「社会性と情動」尺度、児童用レジリエンス尺度の各因子間の相関係数を表6に示す。全体では、レジリエンスの意欲的活動性は、社会的能力の8つの全ての因子と有意な正の相関がみられた。特に自己のコントロール($r=.733$)と強い相関があることが分かった。また、責任ある意思決定($r=.683$)、積極的・貢献的な奉仕活動($r=.656$)、人生の重要事態に対処する能力($r=.640$)でもやや強い相関がみられた。それ以外の社会的能力の因子とも、全て中程度の相関がみられた。レジリエンスの楽観性も、社会的能力の8つのすべての因子と有意な正の相関がみられた。生活上の問題防止のスキル($r=.189$)が弱い相関だったものの、その他の7つの社会的能力とはすべて中程度の相関がみられた。また、レジリエンスの内面共有性も、社会的能力の8つのすべての因子と有意な正の相関がみられた。

次に、男子と女子を分けて、レジリエンスと社会的能力の相関係数の差の有意性の検定を行った。男女間で相関係数の有意差は認められなかった。

4 考察

本研究の目的は小学生版のレジリエンス尺度を用いて、小学生のレジリエンス向上に関して、レジリエンスと社会的能力の関連を探り、SEL-8Sプログラムの役割を検討することであった。石毛・無藤(2005)は、先行研究から独自にレジリエンシーの中核となる7つの構成要因をまとめている。その後、前向き性、決断力、精神的自立性、楽観的思考性の一部が結合してできた意欲的活動性因子と、楽観的思考性に対応した楽観性、そして相談性に対応した内面共有性の3因子を抽出している。このレジリエンシーの中核となる7つの構成要素と、今回の児童用レジリエンス尺度の項目を対応づけてみた(表7)。今回の児童用のレジリエンス尺度は田中(2012)の報告している因子構造ではなく、石毛・無藤(2005)のレジリエンス尺度と同様の因子構造となった。田中(2012)の先行研究では、内面共有性と楽観性に関しては、石毛・無藤(2005)の先行文献と同じだったが、意欲的活動性の挑戦性と積極的活動性が小学生にとっては区分されているという報告であった。挑戦性は「失敗してもあきらめずに、もう一度挑戦する」や「やり始めたことは最後までやり通す」というような

項目であり、積極的活動性とは、「新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる」「新しい行事や仕事にすぐなれる方だ」というような項目である。今回の児童用レジリエンス尺度の分析では、すべて意欲的活動性として1つの因子でまとめることができた。なお、原・古田(2012)の先行研究でも、未来志向、興味・関心の追求、感情調整の3因子に忍耐力が抽出したりされなかったりしていた。原・古田(2012)は、感情調整と忍耐力は自分の感情を抑えるという点では似ている因子であり、小学生にとって区別されたりされなかったりする不安定な因子であることが予想されるとしている。

このように、小学生を対象にしたレジリエンスの尺度の因子構造が不安定な理由として、調査対象人数の問題が考えられる。田中(2012)のレジリエンス尺度は4年生から6年生の184名、原・古田(2011)のレジリエンス尺度は5年生と6年生の162名、今回行った児童用レジリエンス尺度は5年生168名であり、あまり多くない。調査対象の人数をより増やすことで、レジリエンス尺度の因子構造がより明確になるのではないかと考えられる。

レジリエンスと社会的能力の相関関係では、女子のレジリエンスの楽観性と生活上の問題防止のスキルの間を除いて、すべての下位尺度間で有意な相関がみられた。よってSEL-8Sプログラムを通して、小学生のレジリエンスを高めることができる可能性が示唆された。特に、男女ともレジリエンスの意欲的活動性は社会的能力の自己のコントロールと、非常に強い相関がみられた。また、意欲的活動性は、男女とも社会的能力の他のいずれの下位尺度とも比較的強い相関が認められ、SEL-8Sプログラムのねらいとする社会的能力との関連性の強さが示された。レジリエンスの楽観性と内面共有性についても、よく似た傾向が示されていた。

以上のことから、因果関係は不明であるが、レジリエンスとSEL-8Sプログラムでねらいとする社会的能力の間には関連があることが明らかになった。レジリエンスには、先天的に獲得される資質的要因と、後天的に身に着けることができる獲得的要因があることが示されている(平野, 2010)。教育的には、後者の獲得的要因に注目して、それを育てる試みが重要である。今回得られた結果は、社会的能力をSEL-8Sプログラムのような学習プログラムによって高めることができればレジリエンスを向上させることができる可能性を示唆して

表7 児童用レジリエンス尺度とレジリエンシーの中核となる構成要因

項目	中核となる構成要因
積極的活動性	
4 決めたら必ず実行する	決断力 前向き性 前向き性 前向き性 客観性 前向き性 前向き性 自省性 自省性 精神的自立性
5 失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する	
1 やり始めたことは最後までやり通す	
9 新しい行事や仕事にすぐなれる方だ	
15 何かしようと思ったとき、色々な方法を考える	
10 新しい友達や先生に積極的に話しかけることができる	
8 苦手なことで失敗を恐れずに取り組む	
19 自分の間違いやルール違反を友達から注意されたとき、そのことを認めて行動を正しくすることができる。	
14 自分は学校で元気に活動していると思う	
7 自分に自信がある	
楽観性	
16 いやなことでも、時間がたてば自然に忘れることができる	楽観的思考性 楽観的思考性 楽観的思考性 楽観的思考性 楽観的思考性
18 何事もよい方向に考える	
17 いやなことがあった時でも、くよくよしない	
12 困った時、考えるだけ考えたらもう悩まない	
3 困ったことが起きても、よい方向に考えるようにしている	
内面共有性	
11 悲しい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	相談性 相談性 相談性 相談性
6 つらい時は自分の気持ちを誰かに聞いてもらいたいと思う	
2 困った時、友達に助けてほしいとお願いできる	
13 考えを人に聞いてもらいたいと思う	

(注)中核となる構成要因は、石毛・無藤(2005)による。

おり、大変意義深いと言えよう。

なお、SEL-8Sプログラムを行う際にも、いくつかの留意点がある。SEL-8Sプログラムは、“気づきとコツ”の学習と言える。SEL-8Sプログラムで学んだことがゴールではなく、そこから日常生活でいかに実践できるかが重要であり、子どもの“気づきとコツ”を実践につなぐ教職員の教育的な働きかけが大切である。イライアスら(1999)は、SELの効果 genuinely 現れるには2~3年かかるとも述べており、SEL-8Sプログラムは年間に相当数行わないと効果が現れにくいと考えられる。さらに、どのようにして学校の教育課程に位置づけるのかも課題である。

本研究では、レジリエンスと社会的能力の間に関連があることが明らかになったことから、SEL-8Sプログラムの実施で、児童のレジリエンスを高めることができる可能性が示唆された。これからの課題は、実践によってレジリエンスを高めることができるかどうかを確認することである。さらに、レジリエンスを高めることが、現在大きな教育課題の1つである不登校について、すべての児童・生徒を対象とした一次的援助サービスとして、不登校の予防につながるかどうかの検証も必要である。

引用文献

- 原郁水・古田真司 2012 小学生のレジリエンスと対人ストレスコーピングおよびセルフエスティームの関連 東海学校保健研究 36, 43-54.
- 原郁水・古田真司・松村常司 2011 小学生のストレスへの感受性とレジリエンスがセルフエスティームに及ぼす影響 学校保健研究 53, 277-287.
- 原郁水・都築繁幸 2016 小学5年生のレジリエンスを高める授業の効果 静岡大学教科開発学論集 4, 33-45.
- 橋本智恵・小泉令三 2013 対人関係能力を育て自尊感情を高めるための社会性と情動の学習プログラム実践—家庭との連携を重視した SEL-8Sプログラムの実践— 福岡教育大学紀要 62(4), 155-168.
- 平野真理 2010 レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究 19, 94-106.
- 井隼経子・中村知靖 2008 資源の認知と活用を考慮した Resilience の4側面を測定する4つの尺度 パーソナリティ研究 17, 39-49.
- イライアス M.J.ら(著), 小泉令三(編訳) 1999 社会性と感情の教育—教育者のためのガイドライン 39— 北大路書房
- 石毛みどり・無藤隆 2005 中学生におけるレジリエンス(精神回復力)尺度の作成 カウンセリング研究 38, 235-246.
- 石毛みどり・無藤隆 2006 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究 14, 266-280.
- 石原由紀子・中丸澄子 2007 レジリエンスについて—その概念, 研究の歴史と展望— 広島文京女子大学紀要 42, 53-81.
- 小泉令三 2011 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S① 社会性と情動の学習(SEL-8S)の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・Chok C.Hiew 2002 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係 学校教育実践学研究 8, 179-187.
- 森岡育子・岩元澄子 2011 小学校1年生の入学期の実態とレジリエンスの関連—情緒・行動の特徴と学校適応感に着目して— 久留米大学心理学研究 10, 52-61.
- 村木良孝 2015 レジリエンスの統合的理解に向けて—概念的定義と保護因子に着目して— 東京大学大学院教育学研究科紀要 55, 281-289.
- 長尾史英・芝崎美和・山崎晃 2008 幼児用レジリエンス尺度の作成 幼年教育研究年報 30, 33-39.
- 小花和 Wright 尚子 1999 幼児のストレス反応とレジリエンス 四条啜学園女子短期大学研究論文集 33, 47-62.
- 小塩真司 2016 レジリエンスの構成要素—尺度の因子内容から 児童心理 70, 21-27.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰信治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究 35, 57-65.
- 齊藤和貴・岡安孝弘 2010 大学生用レジリエンス尺度の作成 明治大学心理社会学研究 5, 22-32.
- 坂柳恒夫 2016 小・中学生の生き抜く力に関する研究—キャリア・レジリエンス態度・能力尺度(CRACS)の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告 教育科学編 65, 85-97.
- 清水裕士 2016 フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究 1, 59-73.
- 高辻千穂 2002 幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討— 教育心理学研究 50, 427-435.
- 竹田七恵・山本真利子 2013 日本人大学生のレジリエンス尺度の開発及びレジリエンスと立ち直りと精神的健康に関する研究 久留米大学心理学研究 12, 1-8.
- 田中文夫 2012 小学生のレジリエンスに関する研究—尺度の作成と信頼性・妥当性の検討— Hirosaki University Repository for Academic Resources
- 田中芳幸・真井晃子・津田彰・田中早 2011 小学生版「社会性と情動」尺度(Social and Emotional Abilities Scale for Elementary School Children:SES-C)の開発 子どもの健康科学 11, 17-30.

謝辞

本研究をまとめるにあたり、機会を提供し、協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。